

世界の著名な特許にみる ————— 第27回

世紀の発明事業列伝

〈その思いつきが、時代を動かす〉

東芝、東京電力の祖となる“日本の電気界の父”“日本のエジソン”
と称される藤岡市助 その1 導入回

◆産業技術史からみる

エジソンと田中久重（初代・二代）と藤岡市助の系譜◆

◆東芝創立者にみる田中久重と藤岡市助と山口喜三郎の系譜◆

【付録】藤岡市助 総合年表

（世界史/日本史/科学技術史/田中久重・エジソン・藤岡市助・山口
喜三郎 人物史）



芸術・科学・知財クリエイター・弁理士（雅号）

大樹 七海

1. はじめに 日本のエジソン

本号から新章が始まり、東芝と東京電力の
祖ともなる、「日本の電気界の父」、「日本の
エジソン」と称される、藤岡市助 編に入
ります。



出典：工学博士藤岡市助伝、昭和8年

「日本のエジソン」、「東洋のエジソン」と称される人物には、藤岡市助と、ギエモンこと田中久重がいます。しかし、これまで本連載「発明事業列伝」にて、「エジソン」と「田中久重 初代・二代」を2年以上に渡り共にみてきた我々にとっては、似て非なる方々、それぞれ全く異なるスタイルの発明事業家であると感じられたと思います。

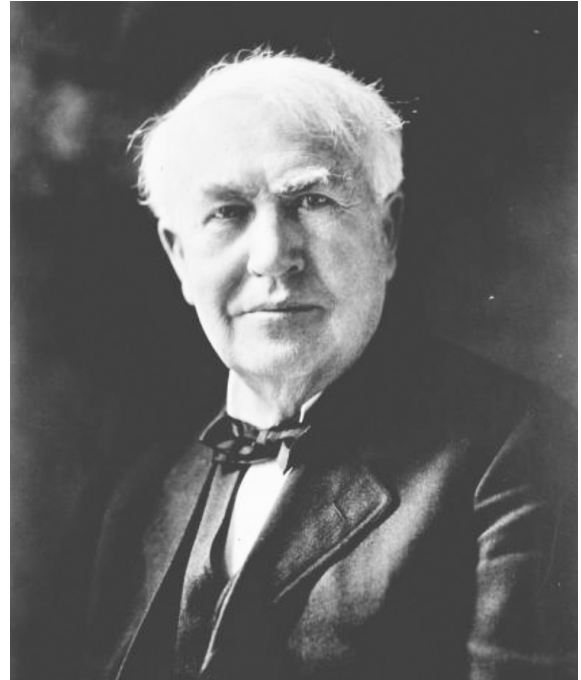
すなわち、エジソン、田中久重（初代・二代）、藤岡市助について、エジソンと田中久重をして「発明狂」、エジソンと藤岡市助をして「白熱電球の完成」という単純なキーワードで、皆「エジソン」、という理解で思考を止めてしまうと、「エジソン」を糸口として、最初のステップには大変良いと思うのですが、そこから先は、それぞれの発明事業への推進力の源泉の違いから来る、行動理論、方法論に対して、理解に欠けてしまう面があると思います。

本連載の目的は、偉人をアイコン(偶像化)して、フェイクを楽しんだり軽くコンテンツとして消費する、というためにあるのではなくて、偉人と呼ばれるほどの功績を残した、その推進力の源泉と行動理論や方法論について、リアルな模索と実践を学び、そこから学び得たことを、我々の人生に生かす、というためにあります。

従って、産業史を踏まえて三者の系譜を、以下に展開したいと思います。

2. エジソンと田中久重（初代・二代）と藤岡市助

(1) エジソンの歩みについて



出典: Thomas Alva Edison, The National Inventors Hall of Fame

まず、エジソン（1847-1931、享年84歳）ですが、18世紀初頭の欧米では、それまでの科学研究の成果を利用した技術開発の所産である、第一次産業革命^{*}に続いて、電磁気学の蓄積^{**}がありました。その応用として、鉄道普及時代に共に拡大していく電信技術を始め、電気の時代が目前に迫る時期に生を受けたのが、大発明家となるエジソンです。

（※第一次産業革命:手工業から機械工業へ、機械工業、鉄工業、18世紀初頭のワットやニューコメンの蒸気機関の発明、1830年代にステイーブンソンの蒸気機関車の実用化により鉄道普及。

※※1785年のクーロンの法則、1800年のボルタの電池、1820年頃のアンペアやエルステッドの発見、1827年のオームの法則、1831年のファラデーの電磁誘導の法則、1833年のレンツの発見、1840年のジュールの法則など）